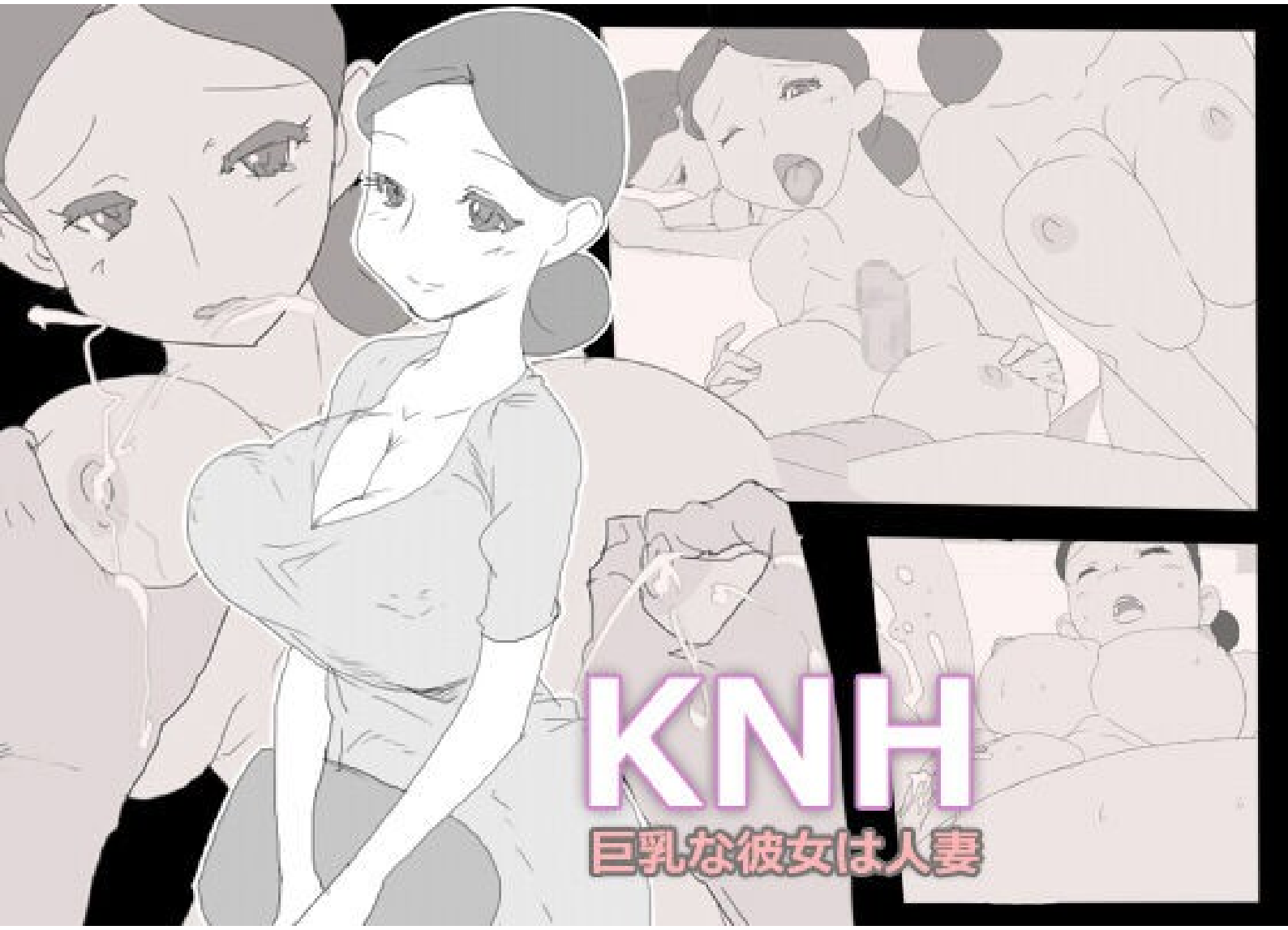
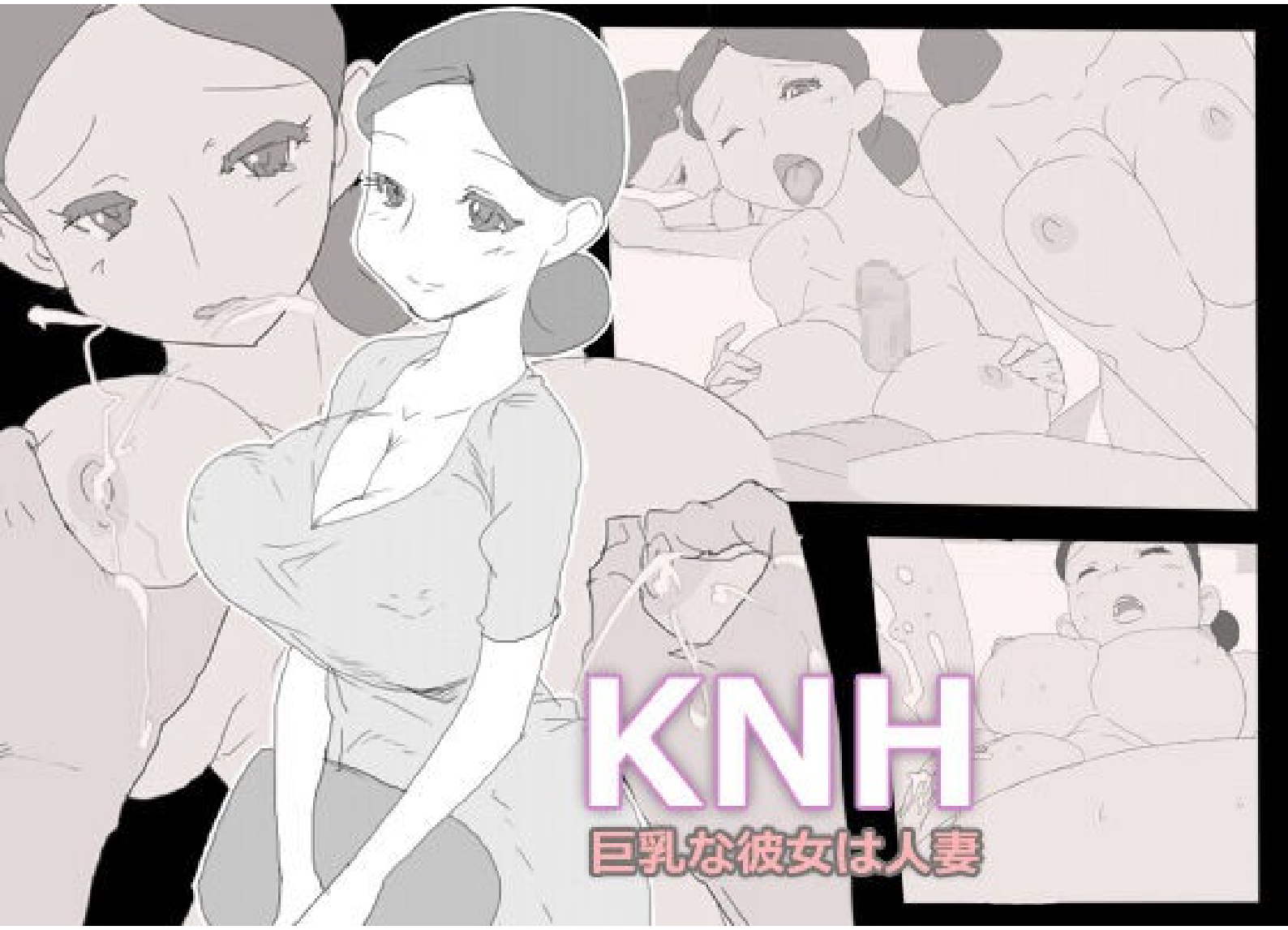
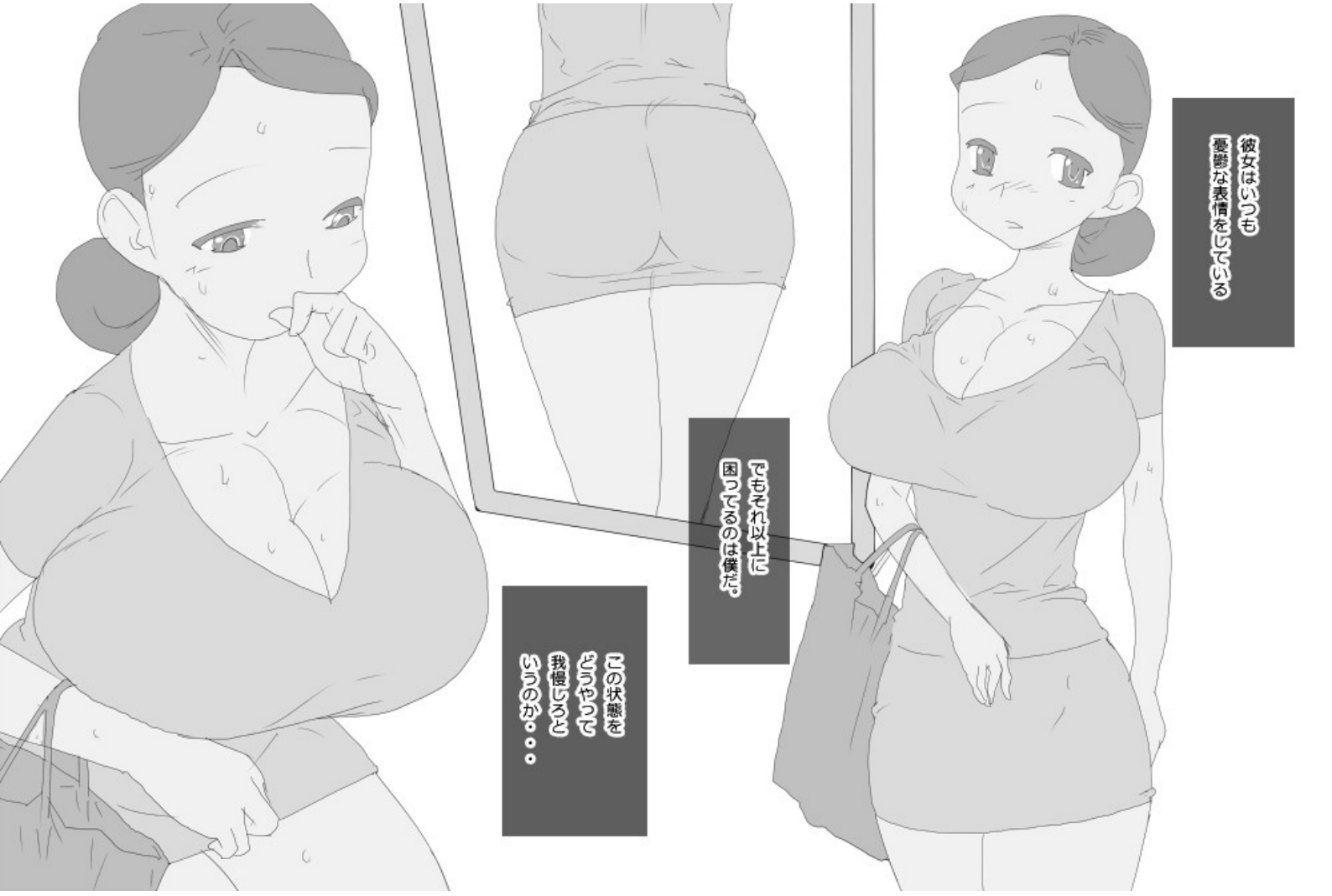

KNH
巨乳な彼女は人妻


KNH
巨乳な彼女は人妻


彼女はいつも
憂鬱な表情をしている
でもそれ以上に
困ってるのは僕だ。
この状態を
どうやって
我慢しろと
いうのか・・・

彼女はいつも
怪しい行動を
とっている・・・
2
周りの男達が
いない時、彼女の本当の姿を
僕にみせつけるのだ。

妄想が膨らんでいく・・
彼女の豊満な胸に
キュウリを押し込んで・・
胸の谷間から
見えるそれは
まるで男性の物の
ようになって・・
彼女がそれを
いやらしく音を
たてて舐める・・

しかし実際はそんな事はない。

現実の彼女はセクシーではあるが

僕の事を少しも気にかけていない。

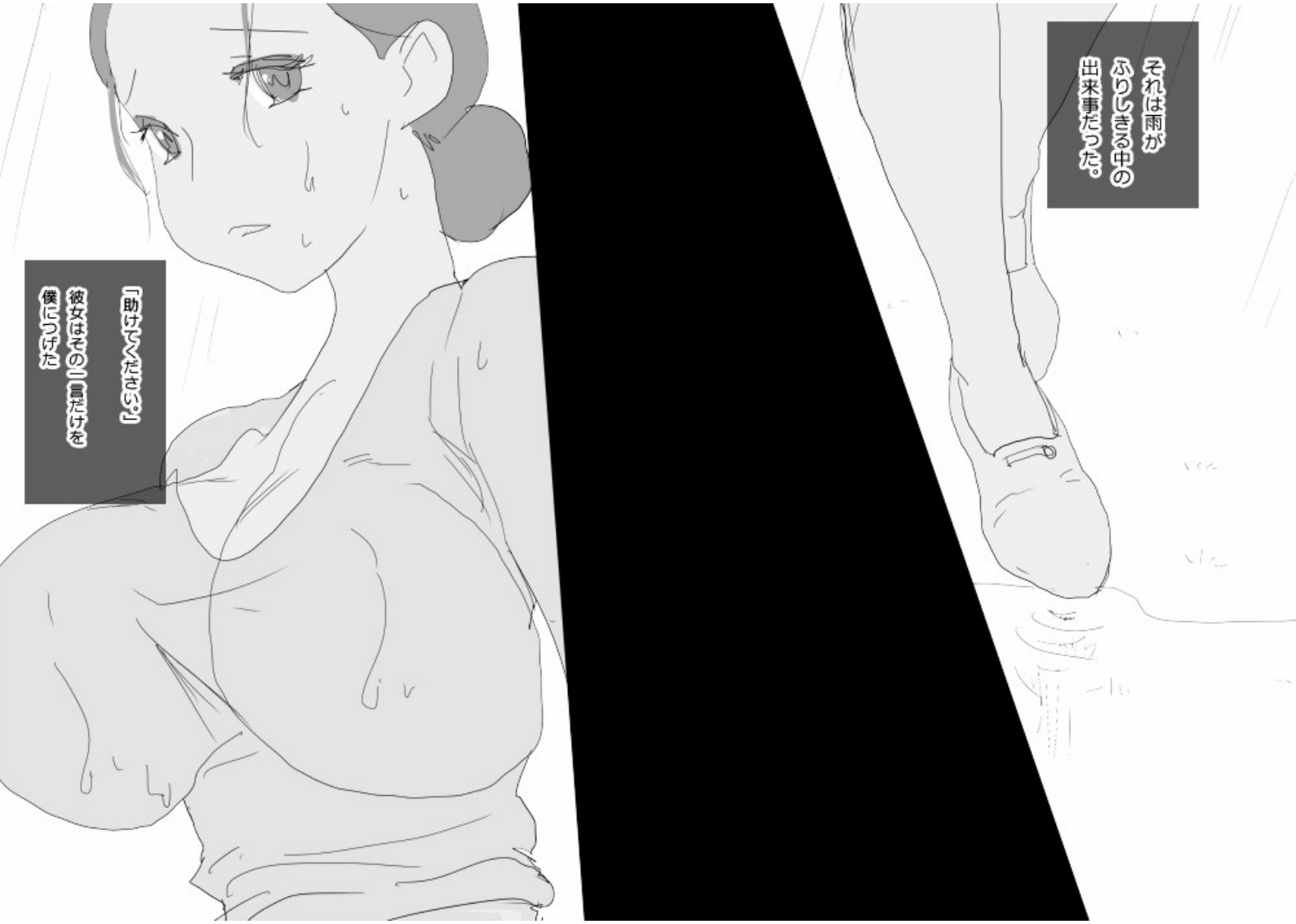
無防備なだけの女だ。

でも・・・

だからこそ、彼女が僕の事を好きなのかもしれないという思いが沸いてくる。

必要以上に意識してしまうのだ。

そして
そんなある日。僕は
彼女と距離を縮める出来事に
遭遇した。


それは雨がふりしきる中の出来事だった。
「助けてください。」
彼女はその一言だけを僕につげた

僕は彼女を自分の部屋へ連れていった。

そして長い身の上話しを聞かされた。

一言でいうのなら不幸・・・・

しかし僕はその話の間も彼女の体に目が釘付けだった。

理性で自分の欲望を押し殺しながら僕は彼女に
親切なふりをし続けた。

そして、それが彼女の信頼を得るのにつながった。

彼女は私に頻繁に会いにきてくれるようになった。

僕はその度に我慢をした。

気を抜いたらすぐにでも彼女を押し倒しそうになる・・・

僕は彼女が気持ちを開いてくれるのを待った。

そしてある日

僕はついに彼女をものにするチャンスに恵まれた。

「　○○さんって・・・
全然、私に興味ないの？・・　」

最初はどういう意味かわからなかった。しかし・・

「　ほら・・・　男の人って・・・　好きじゃない・・・　」

彼女はそう言って自分の大きな胸をチラっとみた。

僕はその瞬間理性が飛びそうになった。

完全に誘っている・・・

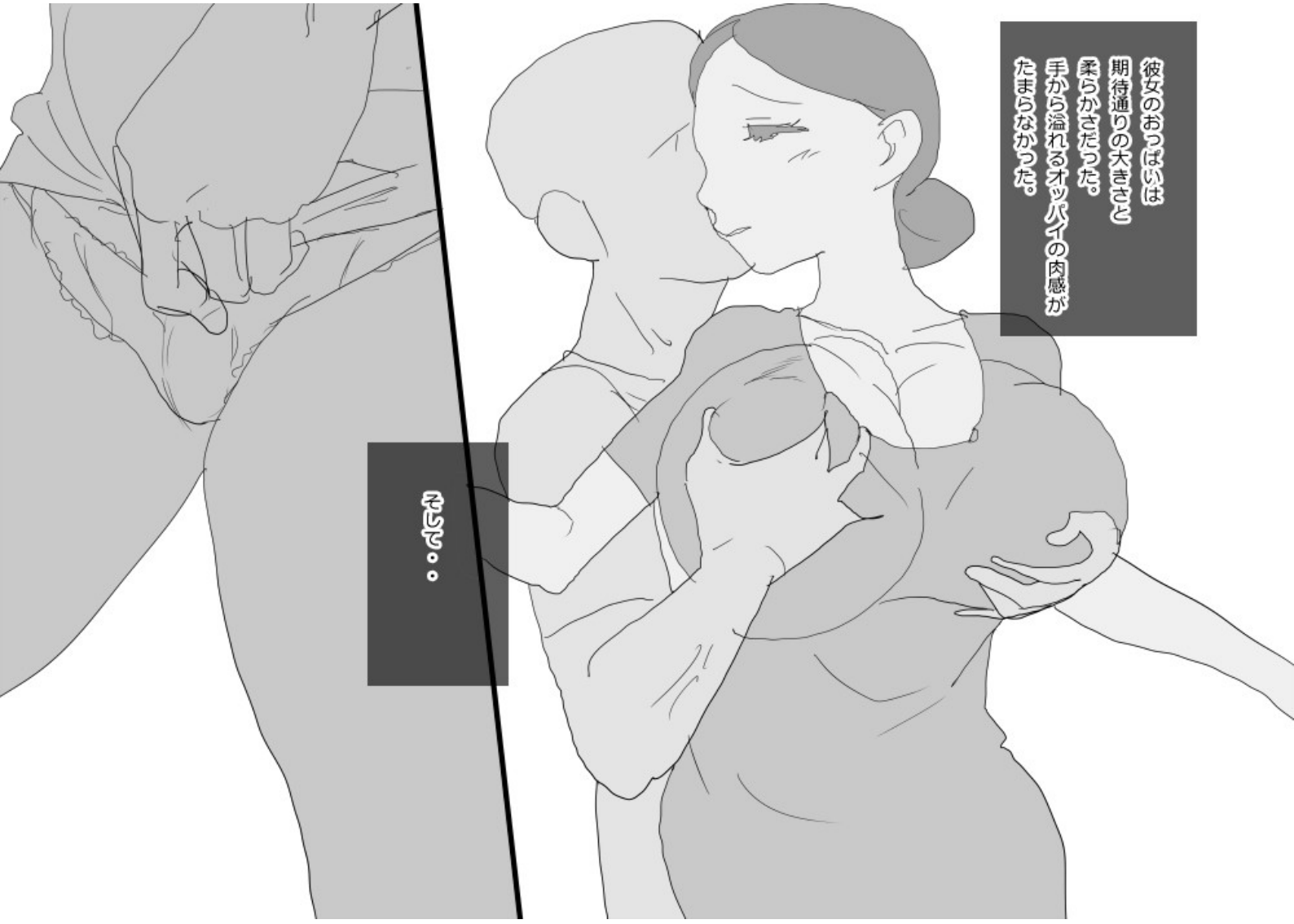
彼女とセックスが出来る・・・

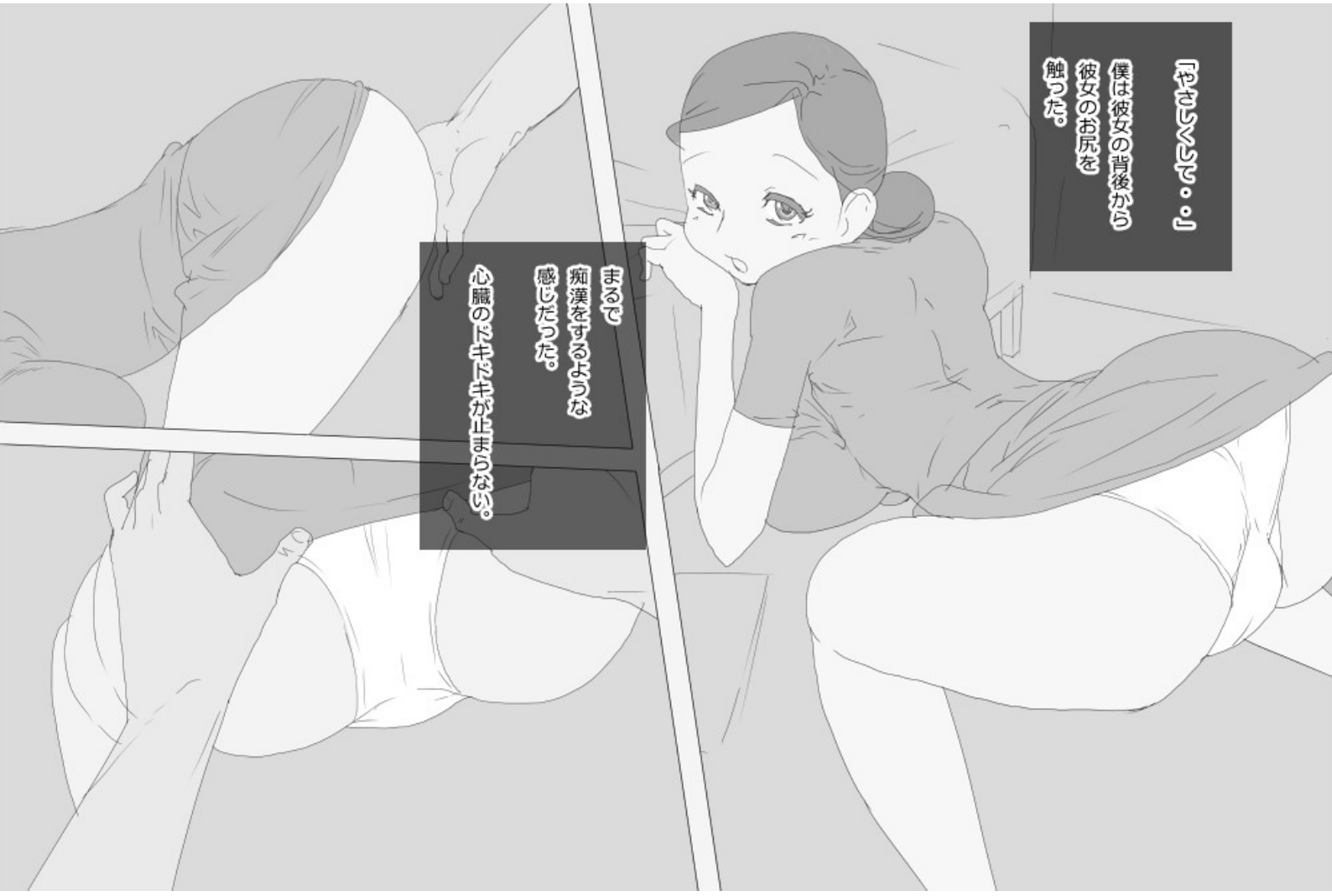
僕は興奮して彼女の体に手を触れた。

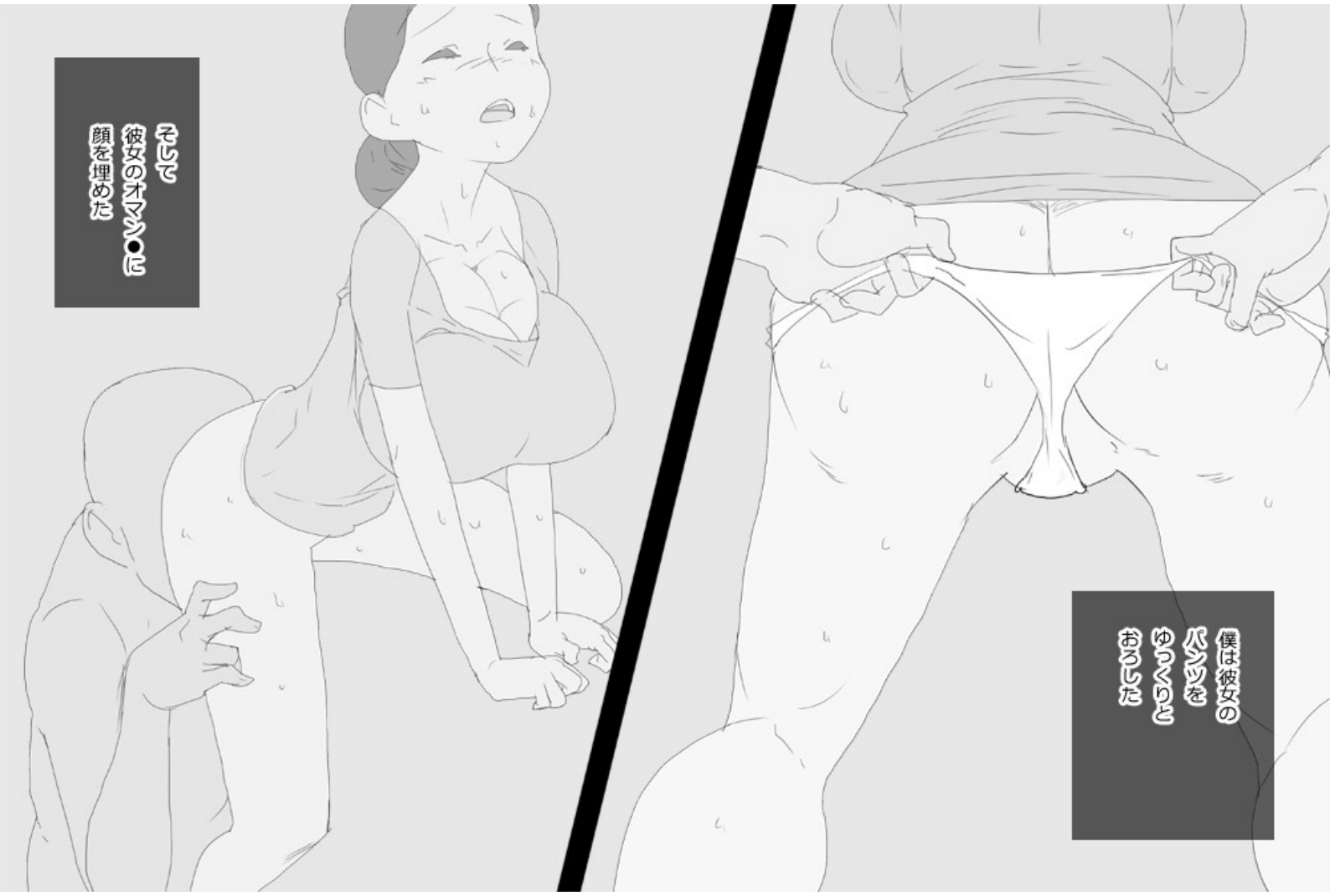
彼女の唇は柔らかかった

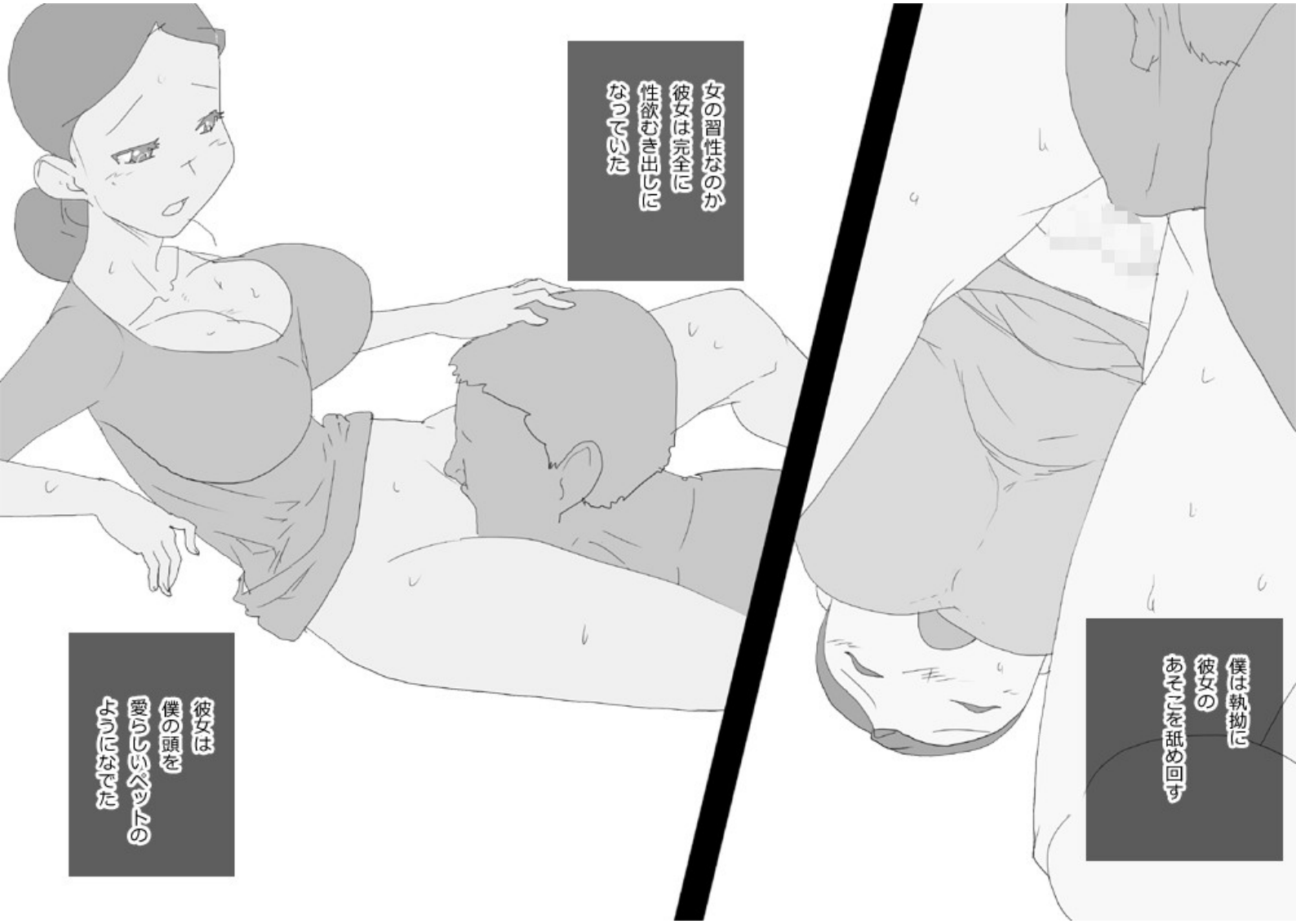
体に当たってくる胸の感触も

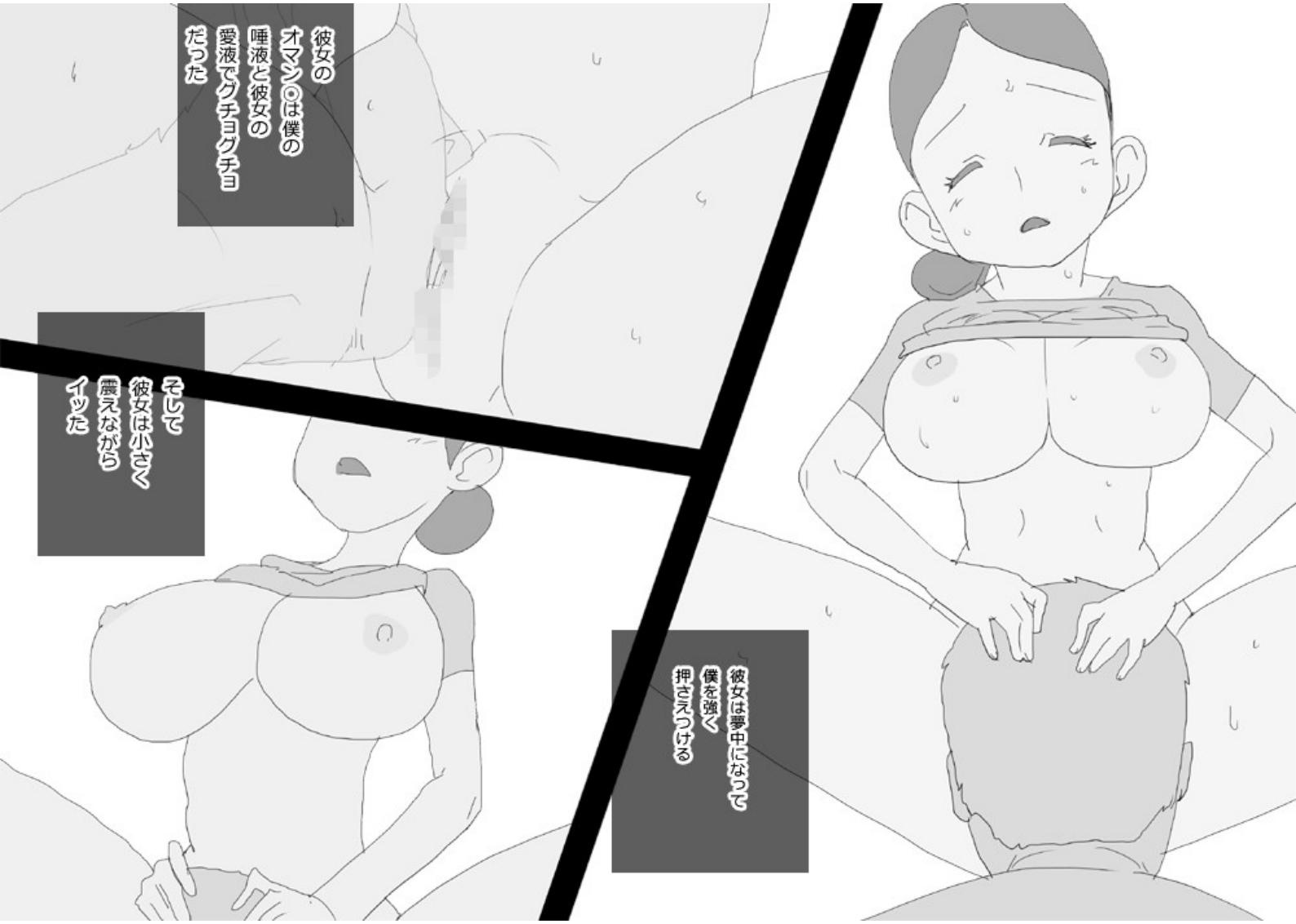
素晴らしく僕は一気に理性がはじけとんだ


彼女のおっぱいは
期待通りの大きさと
柔らかさだった。
手から溢れるオッパイの肉感が
たまらなかった。
そして・・

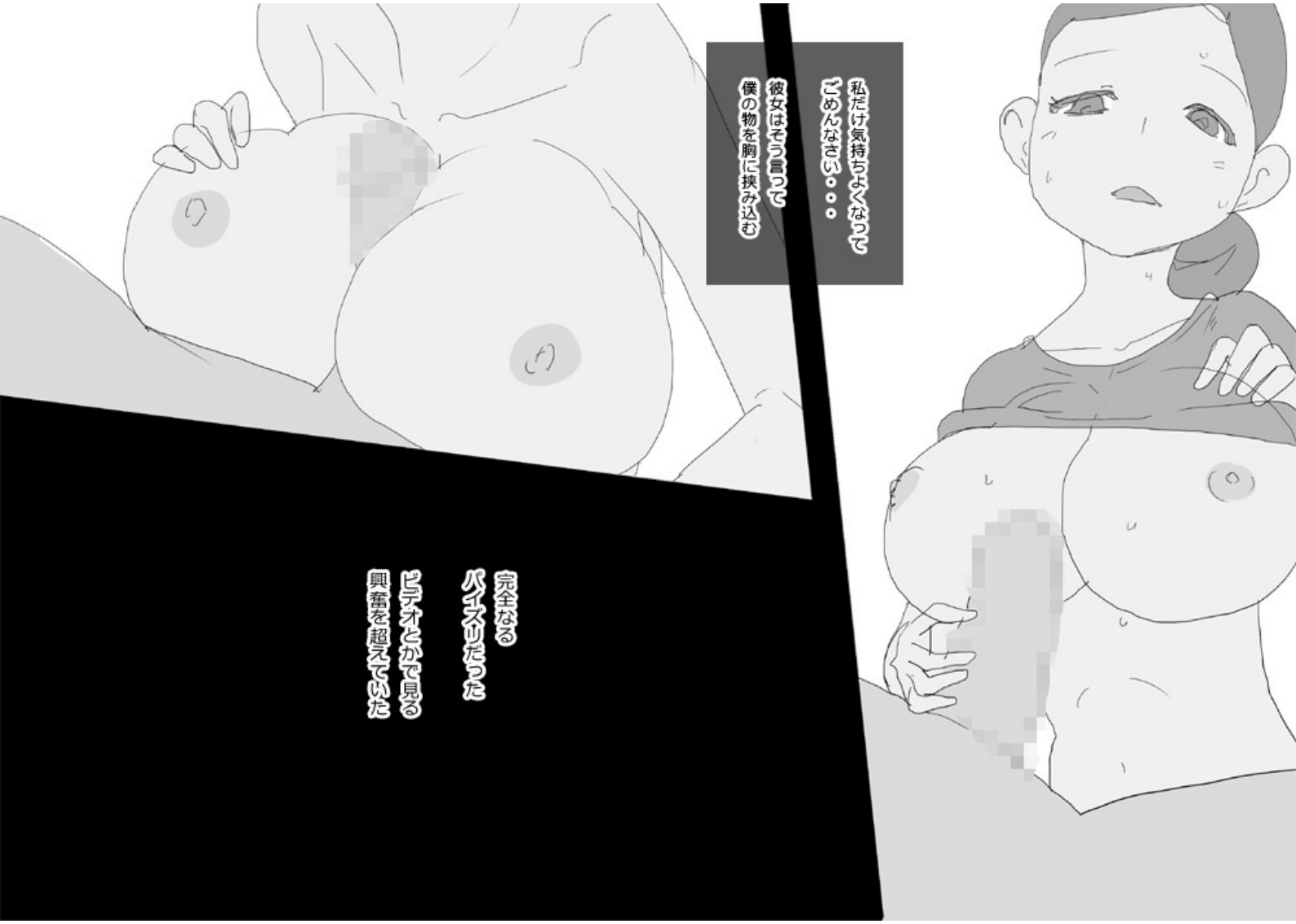

「やさしくして・・」
僕は彼女の背後から
彼女のお尻を
触った。
まるで
痴漢をするような
感じだった。
心臓のドキドキが止まらない。


そして
彼女のオマン●に
顔を埋めた
僕は彼女の
パンツを
ゆっくりと
おろした


僕は執拗に
彼女の
あそこを舐め回す
女の習性なのか
彼女は完全に
性欲むき出しに
なっていた
彼女は
僕の頭を
愛らしいペットの
ようになでた


彼女のオマン○は僕の唾液と彼女の愛液でグチョグチョだった
そして彼女は小さく震えながらイッた
彼女は夢中になって僕を強く押さえつける

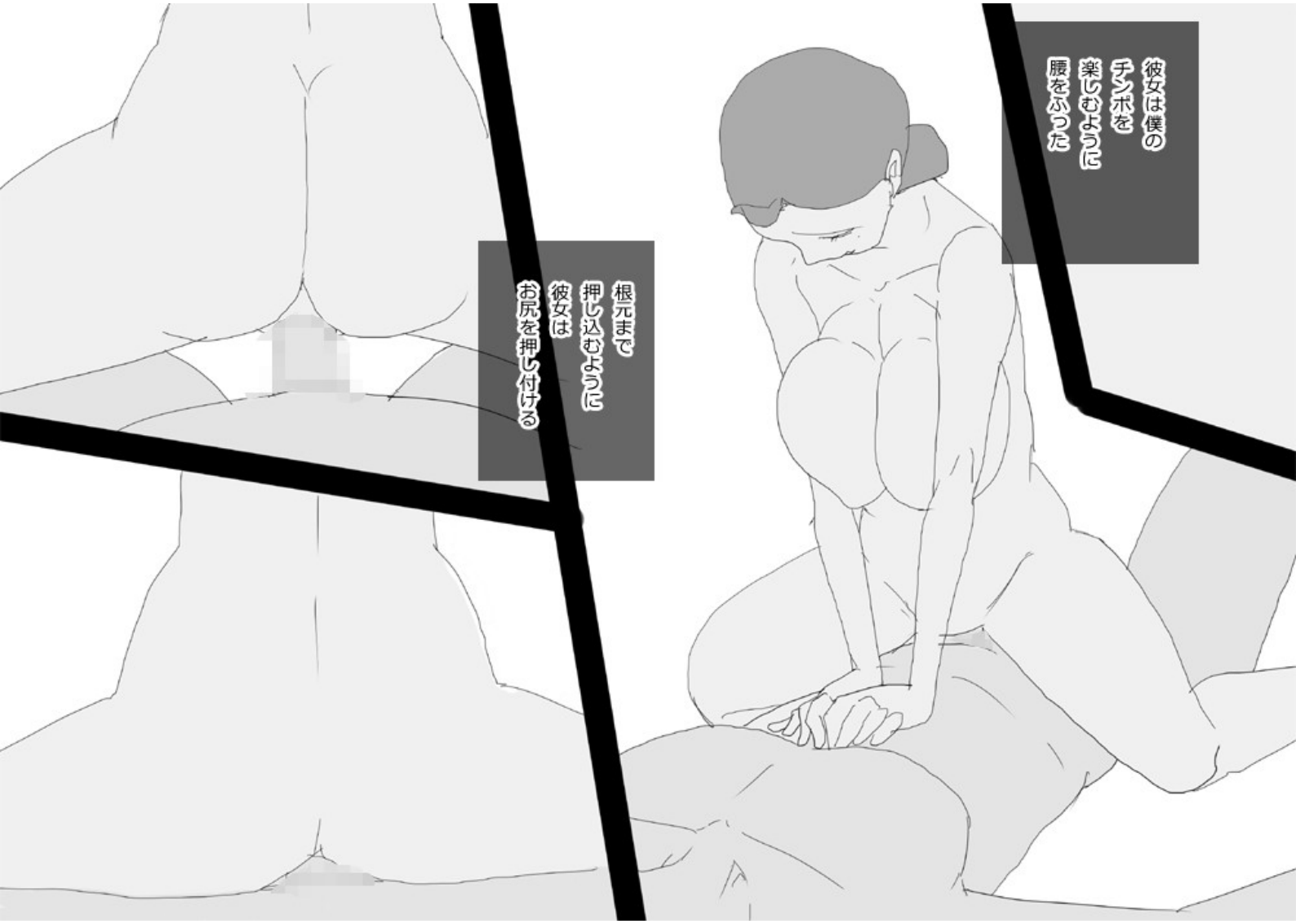
彼女アソコから
潮のように愛液が溢れ出した。
とてもエロい光景だった。

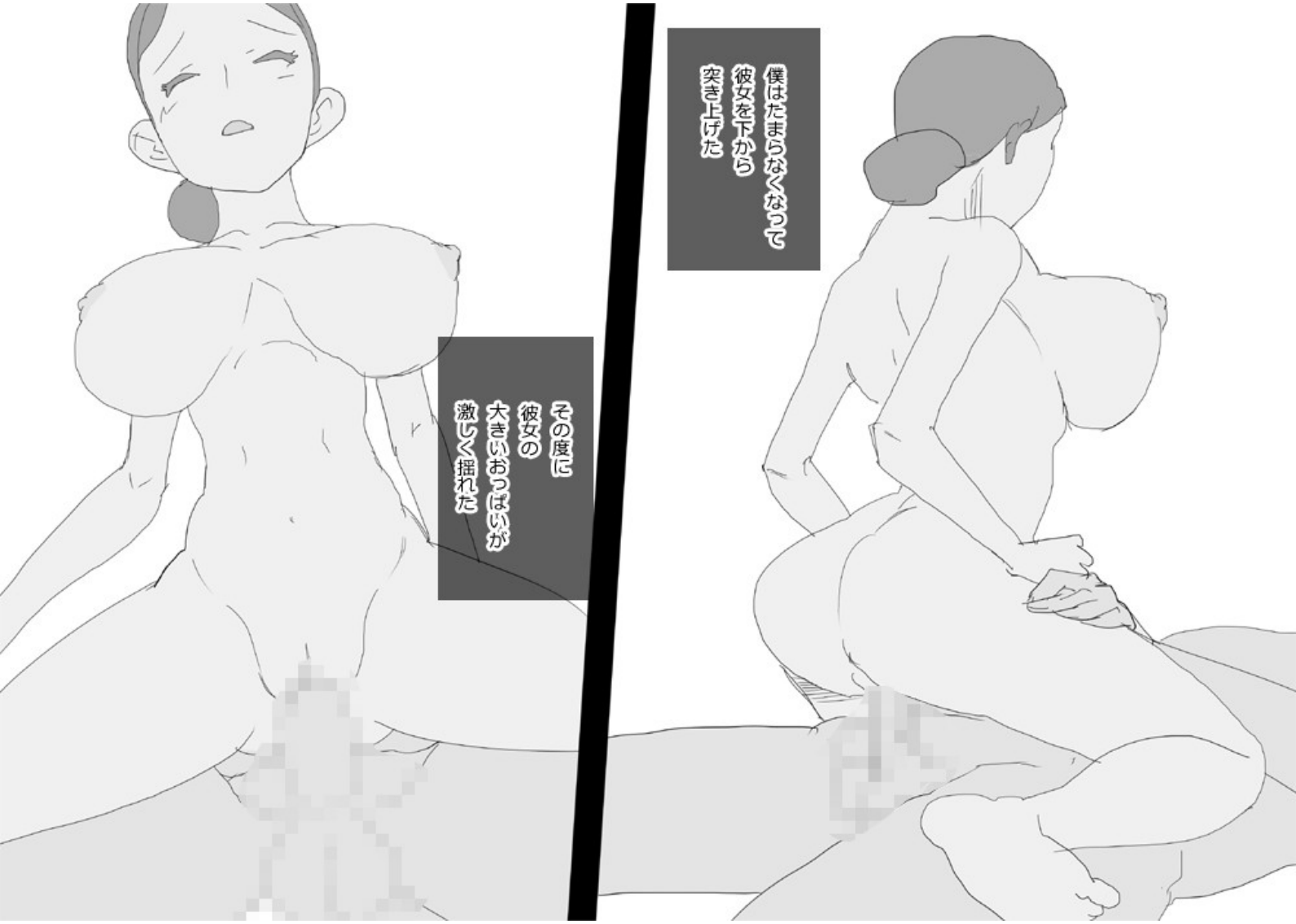

私だけ気持ちよくなって
ごめんなさい・・・
彼女はそう言って
僕の物を胸に挟み込む
完全なる
パイズリだった
ビデオとかで見る
興奮を超えていた

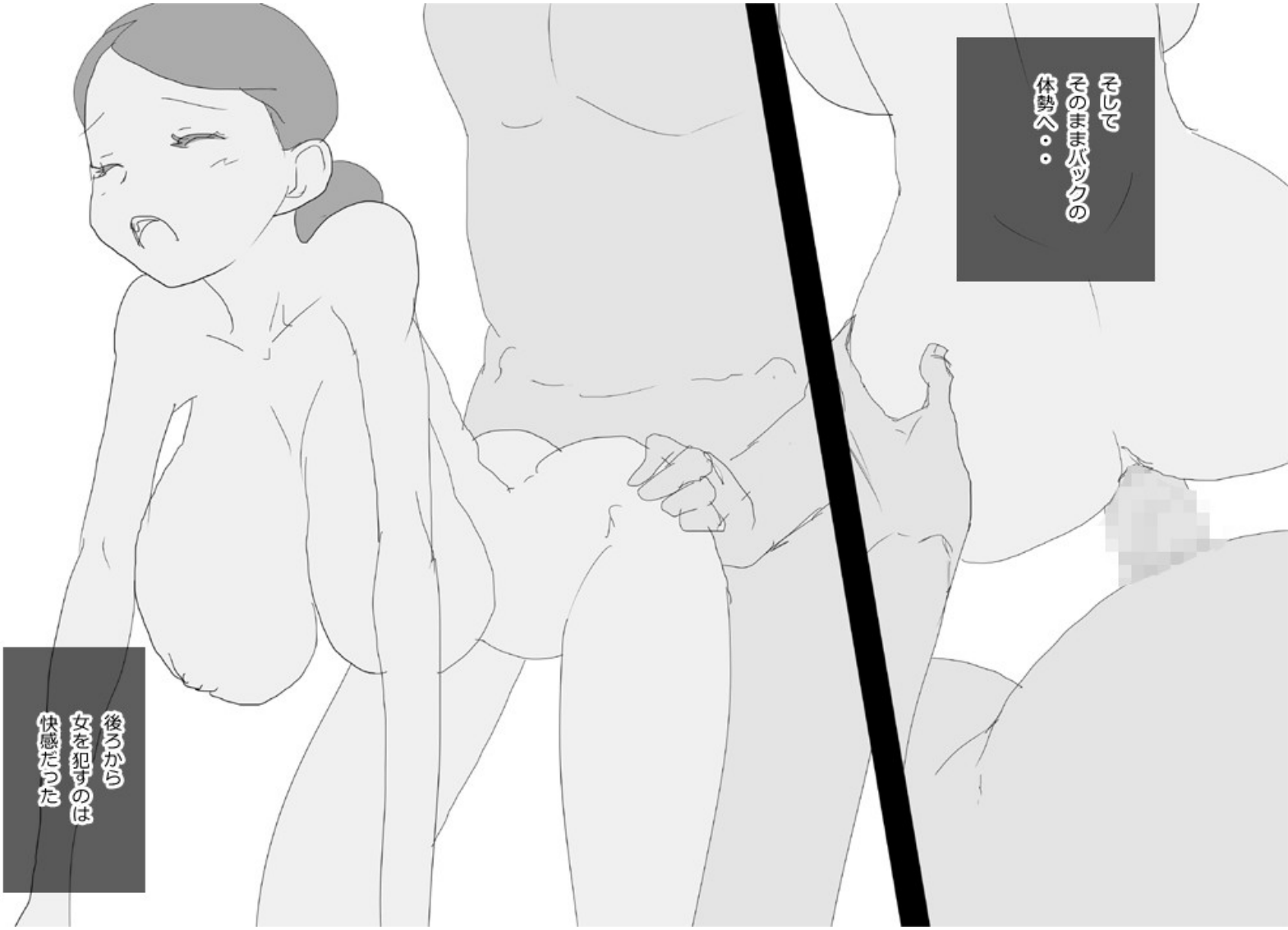
彼女のおっぱいの
肌にせまる
肉感がたまらなかった
そして
フェラ・・・
すぐにイきそう
なった

旦那に
仕込まれただろう
彼女のテクニックは
すごかった
僕は
彼女の口内に
そのまま射精した

彼女は
我慢しきれないのか
精液まみれの
オチンチンを
そのまま自分の中に
押し込む
まるで
全身が
彼女に包み込まれる
ような感触だった

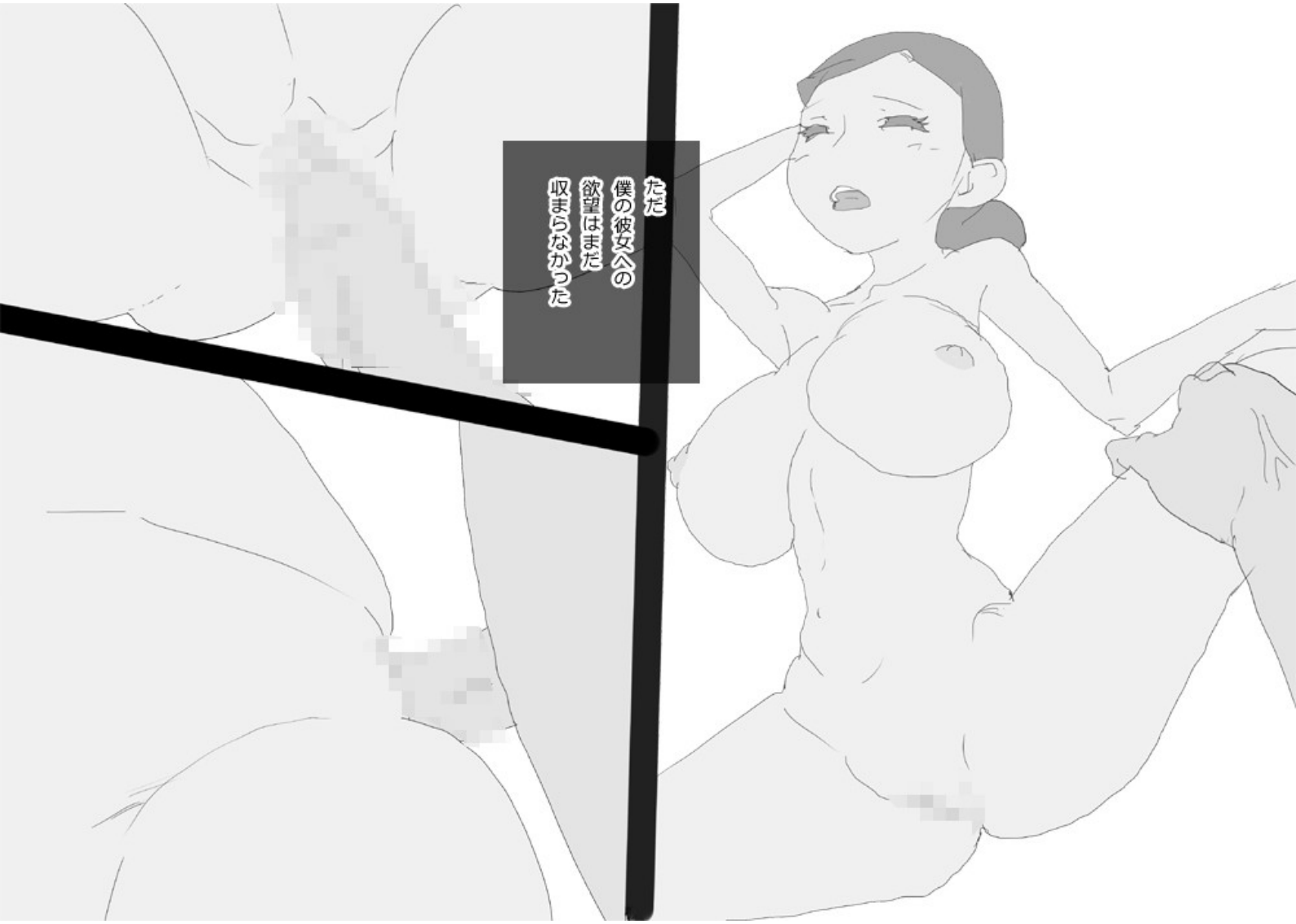

彼女は僕の
チンポを
楽しむように
腰をふった
根元まで
押し込むように
彼女は
お尻を押し付ける


僕はたまらなくなって
彼女を下から
突き上げた
その度に
彼女の
大きいおっぱいが
激しく揺れた


そして
そのままバックの
体勢へ・・
後ろから
女を犯すのは
快感だった

僕はそのまま
中に出すつもりで
激しく彼女を
突いた

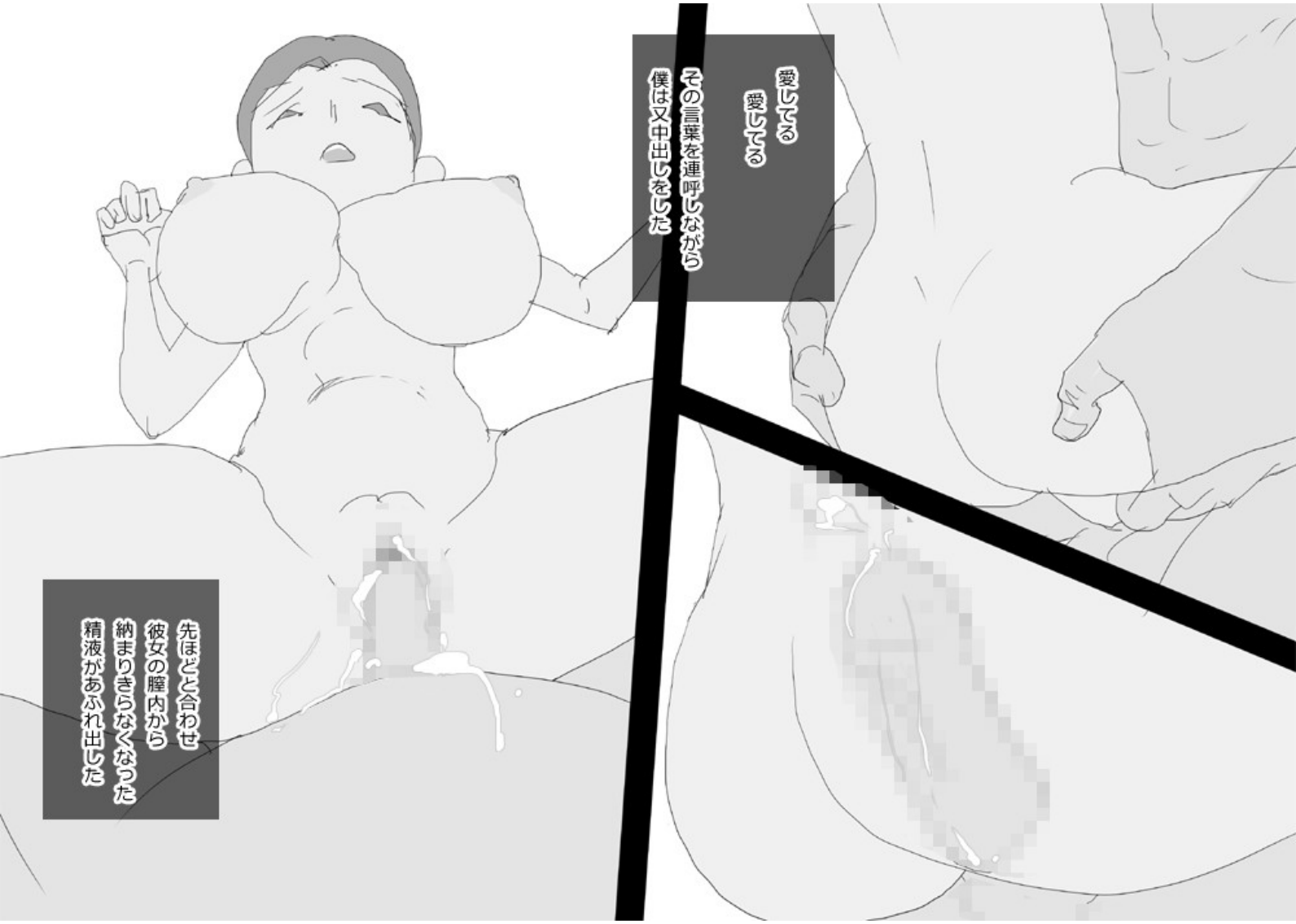
僕は
全てを彼女の
中に注ぎ込んだ
彼女も
息を激しくしながら
イった

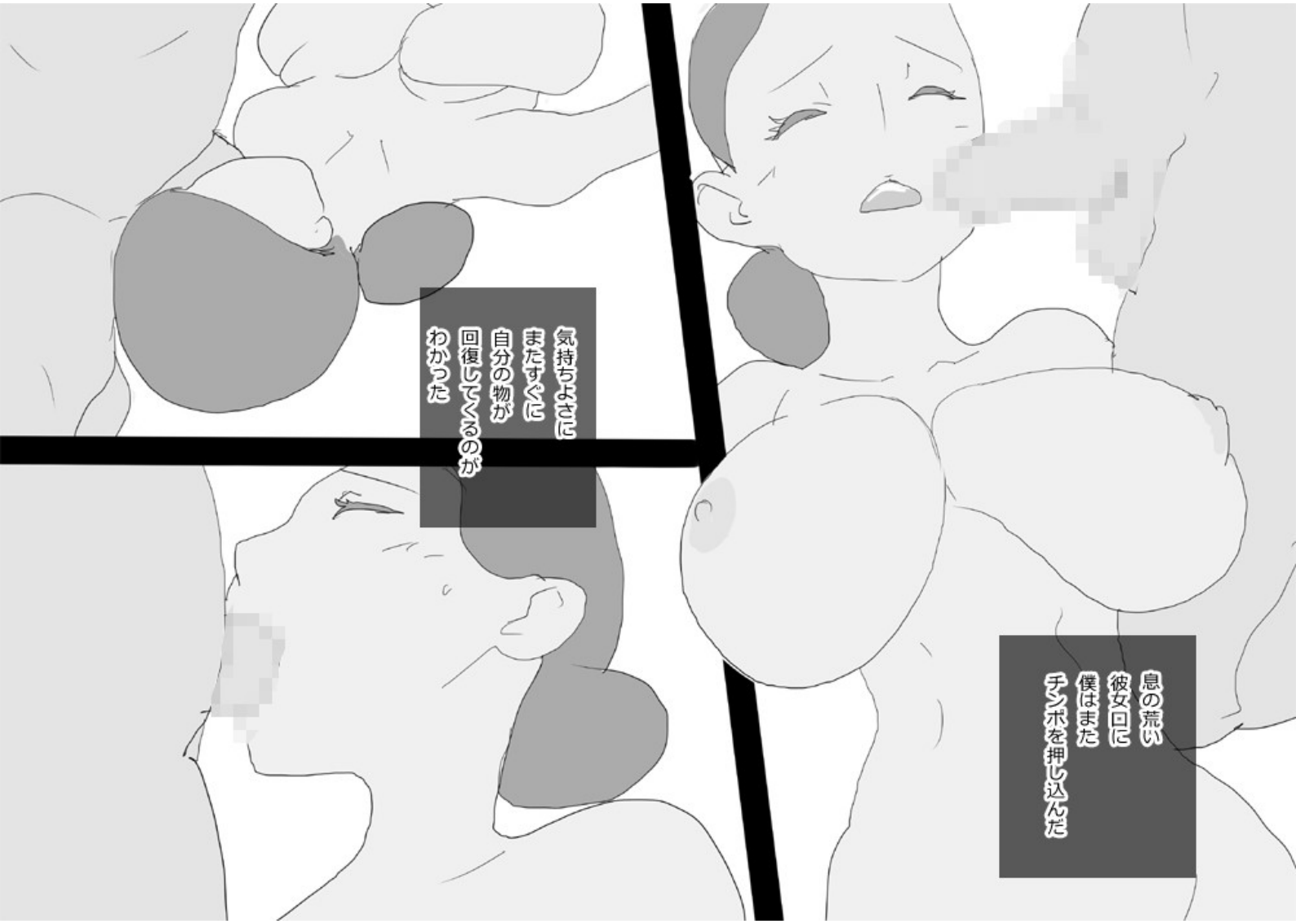

ただ
僕の彼女への
欲望はまだ
収まらなかった

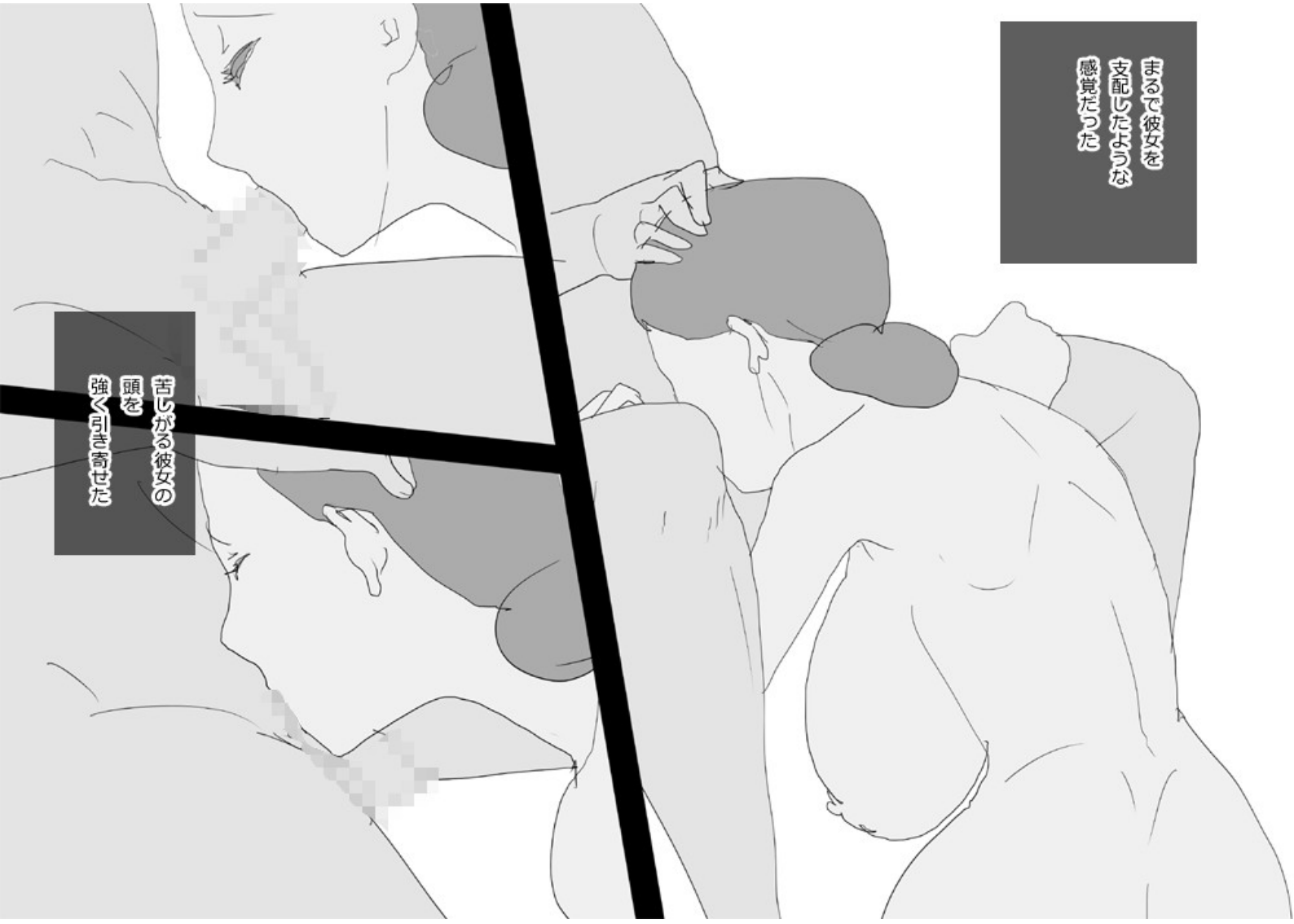
彼女を全部
僕の物に
したかった

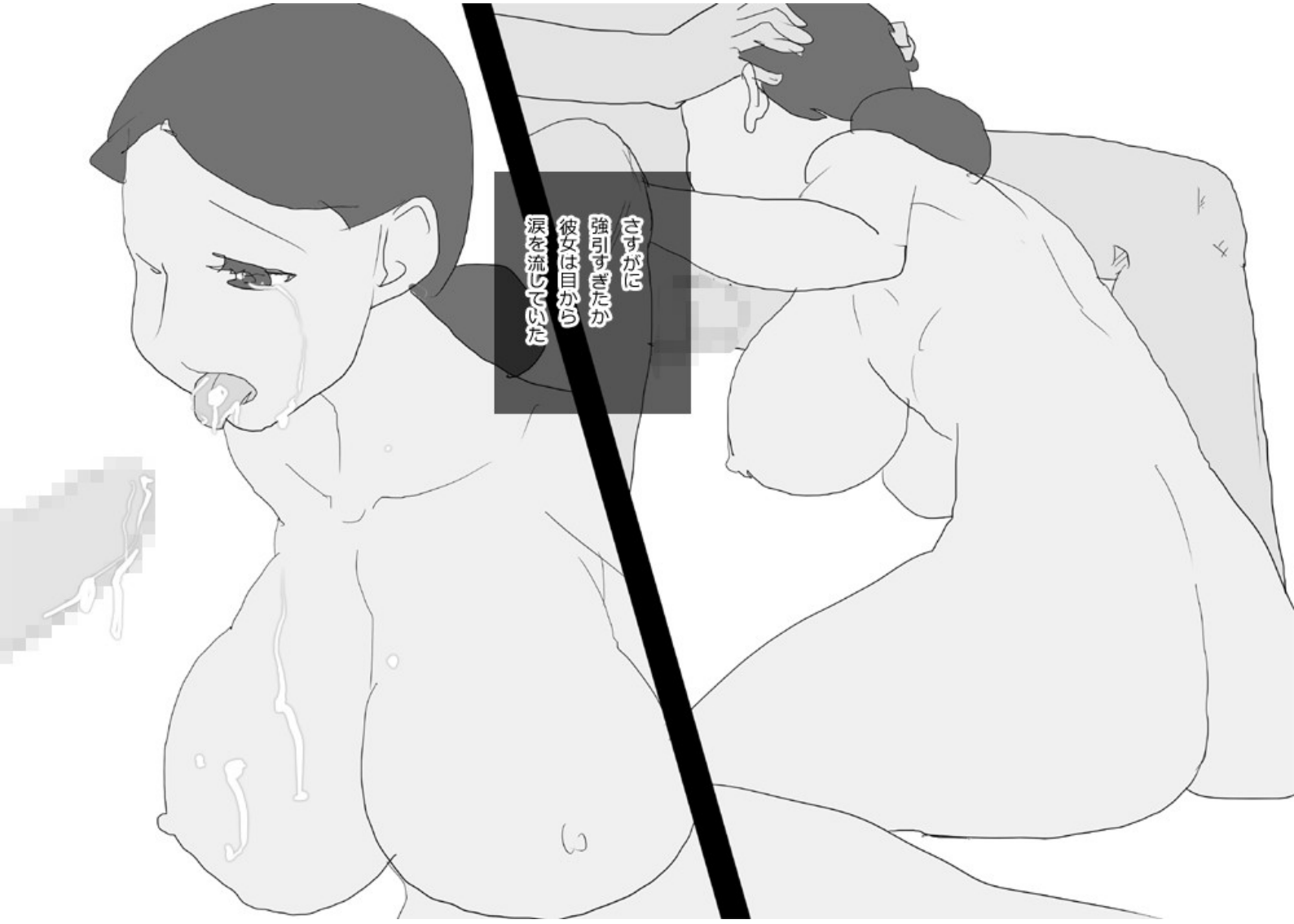
愛してる・・

性欲剥き出しの
クセに
そのセリフで
僕はさらに興奮した

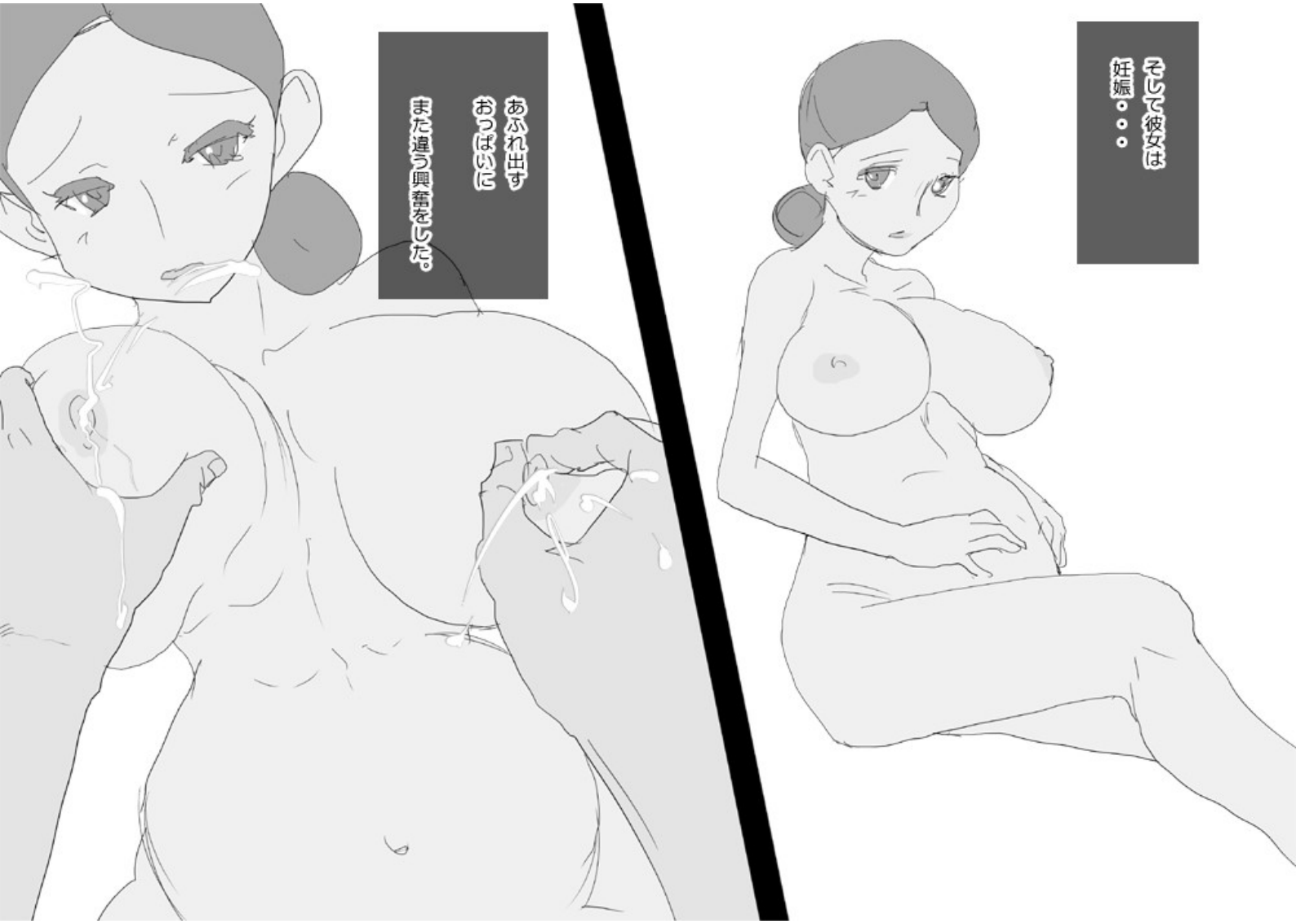

愛してる
愛してる
その言葉を連呼しながら
僕は又中出しをした
先ほどと合わせ
彼女の膣内から
納まりきらなくなった
精液があふれ出した

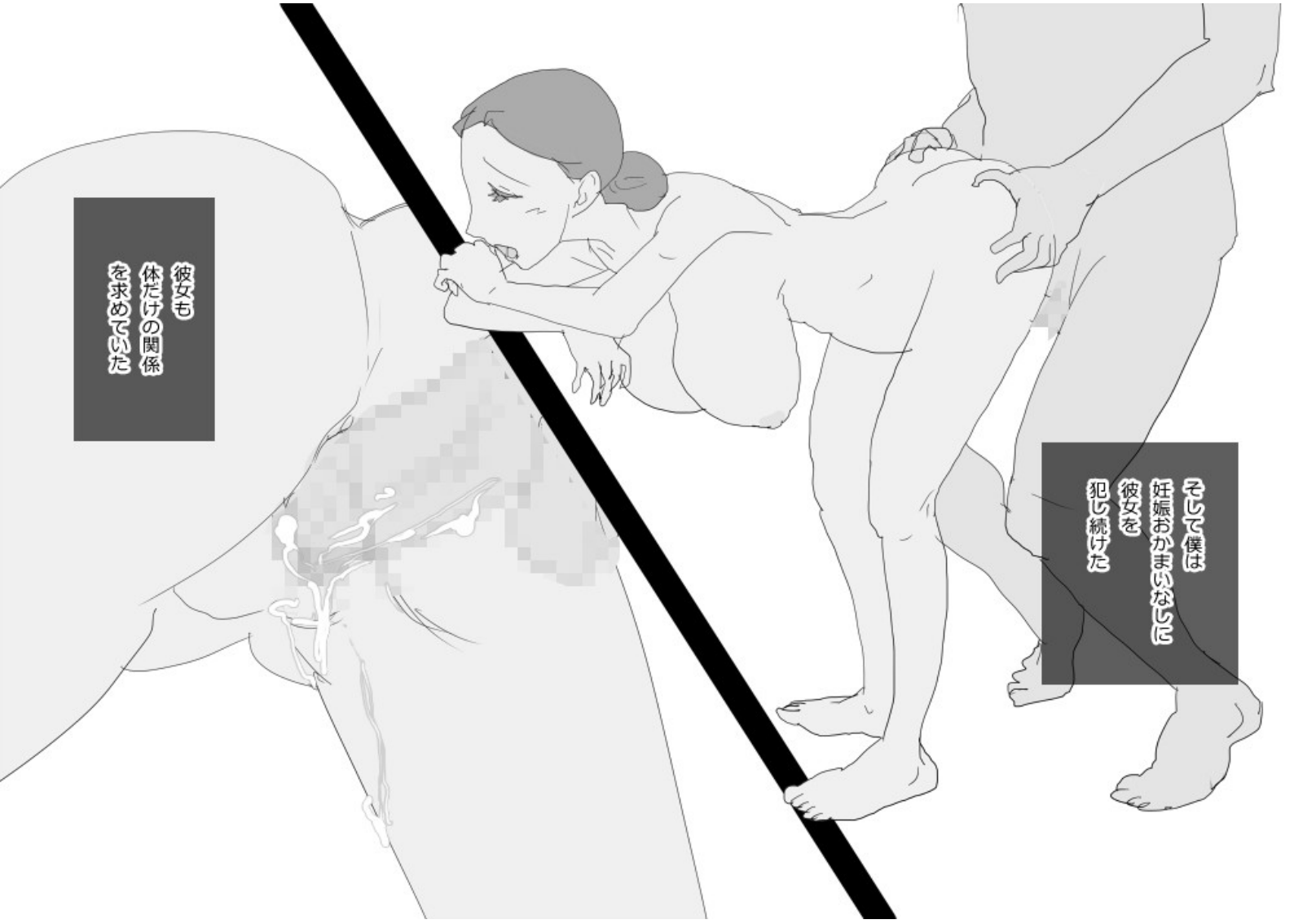

息の荒い
彼女口に
僕はまた
チンポを押し込んだ
気持ちよさに
またすぐに
自分の物が
回復してくるのが
わかった

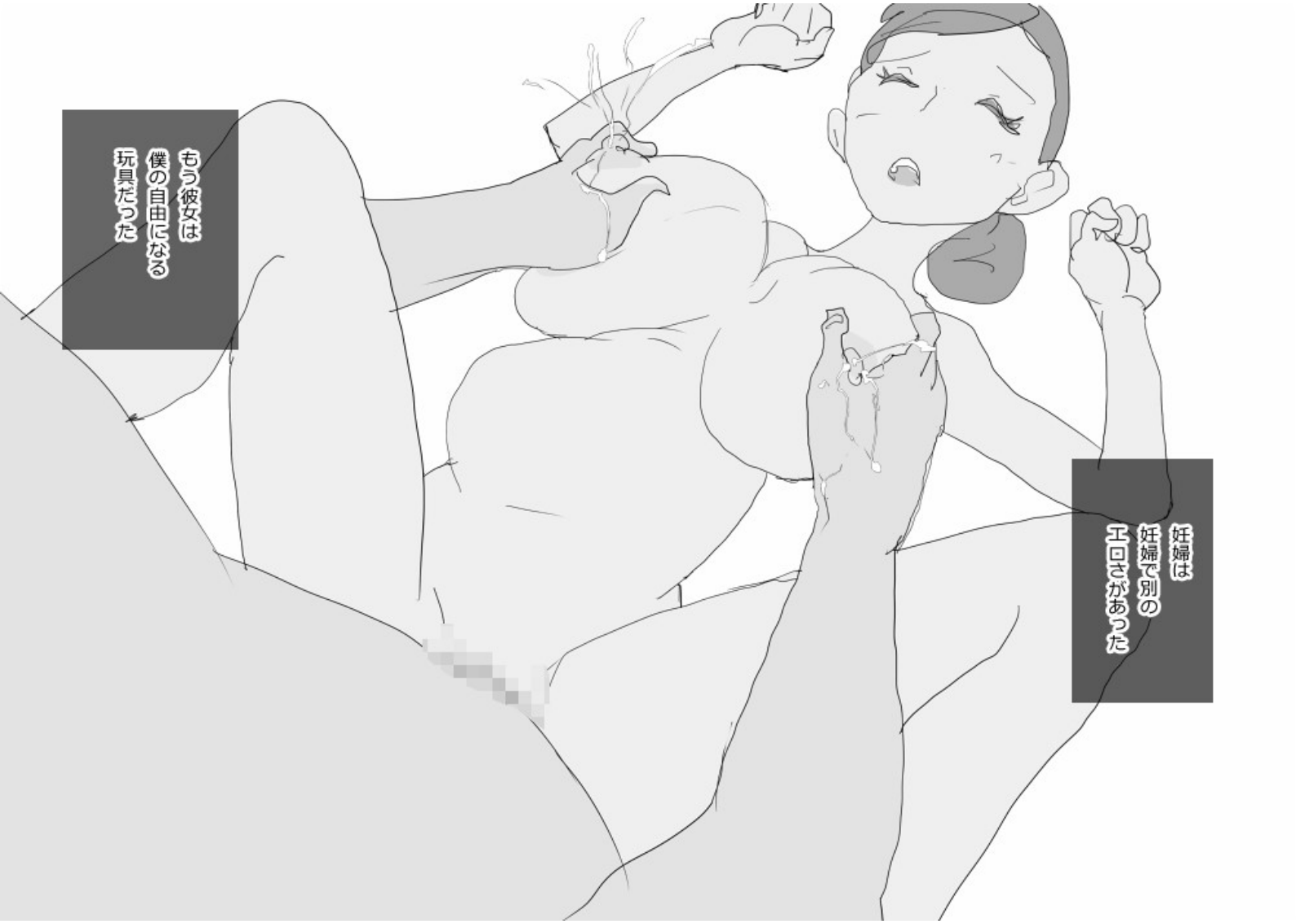

まるで彼女を
支配したような
感覚だった
苦しがる彼女の
頭を
強く引き寄せた


さすがに
強引すぎたか
彼女は目から
涙を流していた

それでも彼女は毎日僕のもとを訪れては
セックスを繰り返すようになった。
僕は次第に彼女を抱くのが
当たり前のようになっていった。
そして自分の気持ちが
彼女を性欲の対象としてしか
見ていないことに気づいた。


そして彼女は
妊娠・・・
あふれ出す
おっぱいに
また違う興奮をした。


彼女も
体だけの関係
を求めていた
そして僕は
妊娠おかまいなしに
彼女を
犯し続けた

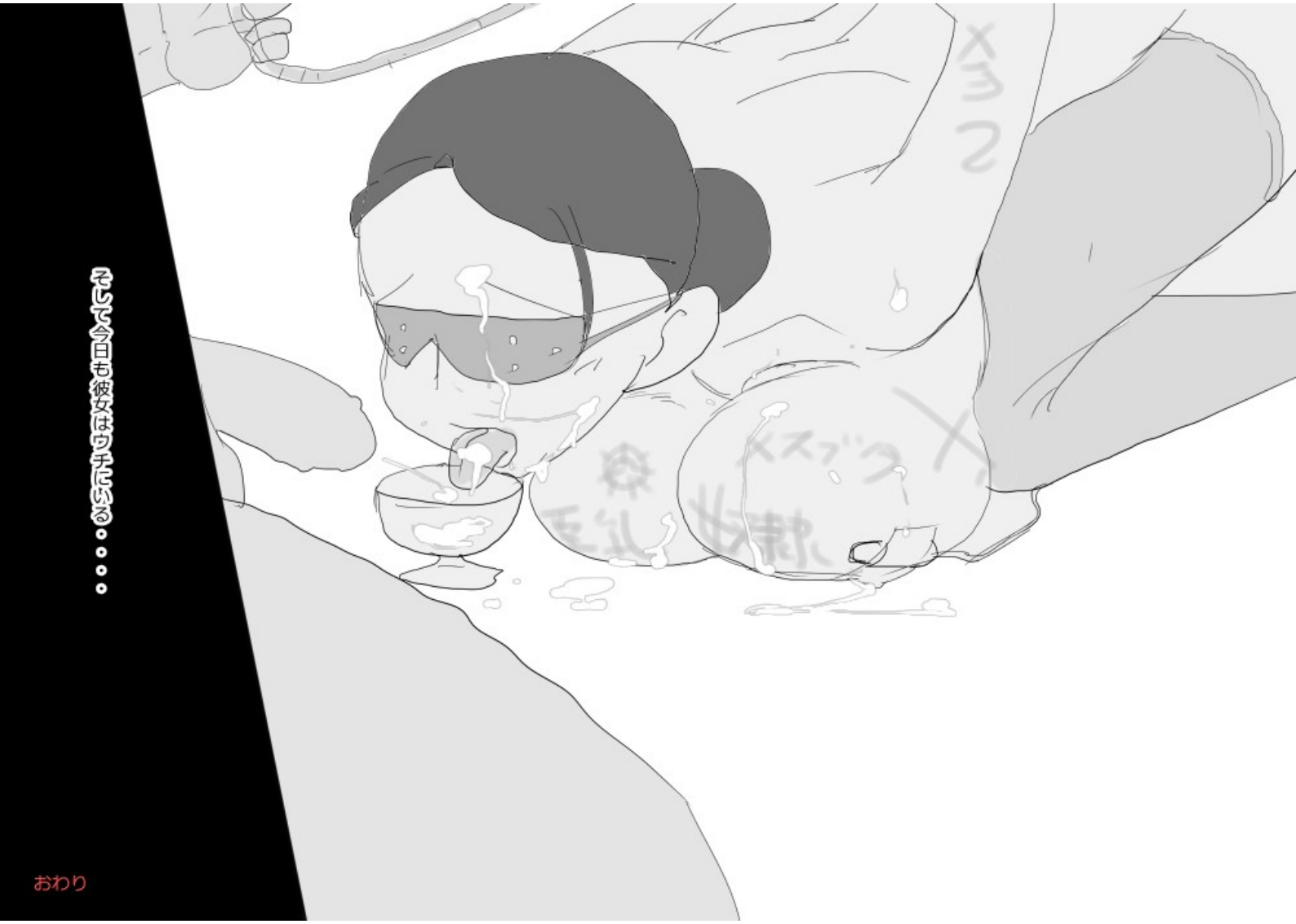

もう彼女は
僕の自由になる
玩具だった
妊婦は
妊婦で別の
エロさがあった

性欲処理マシンと
化した彼女を
僕は入れては咥えさせ
次第に自分の色に
染めていった

女を飼う・・・

僕は彼女を24時間自分の部屋に閉じ込めた

だって・・　彼女はもう僕のペットだから


そして今日も彼女はウチにいる・・・・
おわり

オマ…　ケ？